

学校と地域の融合教育研究会

会報 23



ゆーごう

マーク制作：関知磨子（秋津コミュニティ：蚊帳の海一座）

2003.12.10

融合研のホームページは、<http://www.yu-go.info/>

事務局：〒273-0122千葉県佐倉市中志津7-17-4 TEL/FAX 043-463-1929

メール会員には印刷物での会報は郵送されません。印刷物として欲しい方は、ご自分でプリントアウトをしてください。その分、メール会員にはホームページやメール等による情報面で様々な特典があります。是非、上記のホームページをご覧ください。

本号の内容

巻頭言 ; 油谷雅次副会長（会報の1ページ目に、会長か副会長の巻頭言を載せます）

- 1 大好評！！大阪フォーラムの概要
- 2 総会の結果
平成14年度会計報告 ・ 平成15年度役員承認
地域でのミニフォーラムや勉強会の開催に補助金を出します
- 3 その他
2004年度のフォーラム開催地が東北支部の岩手県に決定しました。
2005年度以降の立候補を受け付けます

巻頭言 油谷雅次（融合研 副会長・大阪府社会教育委員）

私は北小ふれあいルームの活動や大阪府下をはじめ、多くの実践活動を見る中で、いつも私自身、頭をよぎっていたのが、「学校とは？ 地域とは？ 融合とは？ 楽しいふれあい交流だけでいいのか？ 厳しい課題にも私にできることから取り組むことが必要ではないのか？・・・」ということでした。

そんな中、平成14年福岡大会の時に次回の融合研フォーラムを大阪で開催したいとお願いしました。融合研フォーラムを大阪で開催すると決めた時から、フォーラムの内容や構成については、いつも頭の中には、あれも、これもとあふれんばかりのことがいっぱい終止がつかない毎日でした。でも自分自身はたいへんワクワクし、ドキドキした気持ちでいつもいたように気がします。

度重なる東京事務局や大阪事務局との会合を重ねながら、多くの皆様の協力と助言をいただきながら、その内容が具体的になるにしたがい、形が見えてきました。融合研仲間や実践活動している仲間の暖かな言葉に何度も頭が下がる思いでした。当然大阪府教育委員会や和歌山大学の支援も大きな力となりました。

私は今回のフォーラムには確固たる目的をもって望みました

- ・大阪ならではの実践活動の発信
「大阪府地域コーディネーター連絡協議会」の実践活動を全国発信すること
公民館活動通じた社会教育活動の原点を再確認し発信すること
明治以来から住民が主体のまちづくり実践を発信すること
- ・全国の融合研の活動実践をの当会員と会員外の人との情報交流をし、実践に活かすこと

・ 厳しい環境におかれている子どもの課題に真っ向から取り組む姿から私たちの前を真剣に見つめる機会としたい
でした。そして、開催当日を迎えました。

融合フォーラム2003 in 大阪

日程は 平成15年9月27日~28日

場所は 大阪府立青少年野外活動センター

テーマは『ひとり一人の“わたし”が息づく「学社融合」を求めて』

新しい教育方法としての「学社融合」の先にあるものは、いつでも誰でも学べる生涯学習と安全で安心なノーマライゼーションのコミュニティづくりに寄与する学校像だと考えます。同時に「学社融合」の前にあるものは「ひとり一人の“わたし”」が、生き活かされる学社でなければなりません。6年目を迎えた融合研の大阪大会は、融合実践を磨き合いつつ、「その前にあるもの、先にあるもの」を見ずえた大会にしたいと思いました

フォーラムは9月28日 午後3時に無事終了いたしました。

結果的には、日程（秋の体育大会催し日との重複）も、場所（大阪府最北部の山中）も、放送設備（ポータブルマイクのハウリングによる音の割れ）も、最悪？となった大会でしたが、そんなことは全く関係なく、第一日目は、提言者の山本健滋さんの確かな実践に同じ思いができ、各分科会発表者の“本物”の実践活動を参加者と相互に共有ができ、そして、屋台フォーラムに集う人々の熱気と熱心さに助けられ、大いにフォーラムは盛り上がりました。第二日目には、さらに提言者の庄子平弥さんの年齢を越えた圧巻の提言には大きな拍手がその結果を表していました。最後のとどめは、ダイアログの大平光代さんと田上時子さんによる、お二人の子ども課題に直面する厳しい取組みを“本音”でしゃべっていただいたことは、私たちにしっかりとした目の前にある課題を突きつけられました。そしてお二人から「小さい力でも合わせて」「孤立させない関係を」創りだそうというメッセージをいただきました。

今や学校も地域も融合や協働の方向には動き出していますが、まだまだ体裁だけよそおっていたり、どこかしら自分たちのものではない活動であったり、学校も地域に開放すべきかどうか不安を抱いているように思います。行政支援もまだまだ充実しているとはいえません。それより地域、学校、行政に本気で取り組む意識もレベルダウンしてきていることも気になります。

私たちの目の前にある課題が何なのか？ 楽しければ良いだけではなく、周りに目を配らせ、小さい力をつなげていく必要がある人たちがいることも決して見過ごしてはならないと考えます。

私の頭にあったモヤモヤが解き放たれたわけではないが、できることから小さい力をつなげていく活動を今、新たに始めています。全国各地の融合研の活動がこれから世間に問われてくる時代に入ると同時に、大切な実践活動をやり続けることが重要になってきます。

今回フォーラム開催することによって、開催地に確かな実践をその地に育ませることができることが証明できました。

是非、あなたの地域で融合研フォーラム開催をしてください。

1 大好評！！ 大阪フォーラムの概要

山本健滋 氏

和歌山大学生涯学習教育研究センター教授(センター長)

社会福祉法人アトム共同福祉会理事(会長)

こころの子育てインターネット関西副代表

1 はじめに

大学院生の頃から様々な実践を重ねながら、35年間にわたり「社会教育論」「生涯学習論」を専攻。その後、「子育て支援システム論」についても実践・研究を進めてきた。

子育てと町作りを実現する保育所を作ろうと長年働きかけてきた。

2 アトム共同保育所からアトム共同保育園に

長崎の少年のような子が増えている。支える社会とケアする施設があるかどうかが大変であり子どもや家族を孤立させない社会が大切である。

熊取町・・・タオル、農業のまちから大阪のベッドタウンへ変貌

核家族を支える施策として、無認可アトム保育所への公費投入から、住民行動事業としての学童保育への公費投入へと進めてきた。

共同保育所から見えるもの

地域・家族が見えてくる。核家族、高齢者、障害者問題や長時間通勤・労働問題、など社会の情勢も手に取るようにわかり、住民の切実な要求も見えてくる。

⇒ まちづくりとして提言し続け、施策として展開してきた。

- ・ 行政に一方向的に求めない
- ・ 一部住民に押しつけない
- ・ 住民全体と行政当局と知恵を出し合うことが必要

認可保育園への転換

規制のある認可園に転換することに疑問視する声があがる

⇒ 保護者負担のできない、排除される家族・子どもにこそ支援を行う。

- ・ 無認可時代は、保護者負担できる者しか受け入れられなかった
- ・ 町立を民営化することによる混乱は覚悟の上
- ・ 自立した市民、まちづくりに取り組む市民を育てる

産みの苦しみ

・ 旧アトム職員と新規採用職員の混成 20才過ぎで役に立つわけではない。育てる責任。

・ 旧アトム子どもたちと旧町立子どもたち

管理から開放された子どもたち(アトム) 問題解決、コミュニケーション経験無しの子どもたち(町立)の混在は、「学級崩壊」の前倒し状態だった。

・ 保護者のクレームの連続 「子育て支援は返り血を浴びる」 涙の日々

交流・融合へ

・ 保護者の変化 クレーム、トラブルへの個別対応、地道な努力、懇談会の積み重ね

・ 「混乱」から「交流・融合」へ 何を大事にしているかがわかってきた保護者子どもたちの成長の姿が何よりの証

まちをつくるひと

・ 現場に集まる個々の情報。それを生かし、相互理解を深め、支えある関係を作り上げる者が重要である。 旧アトム共同保育所職員のような「公務員」

3 ヒトを育てる社会へ向けての構造改革

「子どもをさがす」エピソード 一人の子をみんな知っていた時代

- ・ 居なくなった子どもを地域の人たちが、自然に役割を分担して探し出した。それは、皆がその子のことを知っていたからできたこと。(宮本常一著・「忘れられた日本

人」)
「子どもをさらう」風景 構造改革（高度経済成長）がもたらした現象
・ 産業を育てる 相反する 人を育てる
⇒ 人を育てるための骨太の構造改革が必要

提言2 私のノーマライゼーションのまちづくり実証実験体験活動

誰でもが安全に安心して暮らせるまちづくりへの道筋

学校と地域の融合教育研究会 副会長 庄子 平弥

1、学社融合教育は手段であって目的ではない

学社融合の終局の目的は何か

子どもも大人も、誰でもが、いつでも学べる生涯学習のまちづくりに寄与する学校をつくる。
子どもも大人も、誰でもが、安心・安全なノーマライゼーションのまちづくりに寄与する学校をつくる。

2、学校教育の改革は、ノーマライゼーションのまちづくりへの地ならし段階

学校施設を地域に開放し、学校が地域の文化センター的役割を担うことによって、在学中の子どもの居ない家庭でも「私たちの学校」という感覚を定着させる。

初めから双方にメリットを生み出すように仕掛けなければ融合には発展しない。

「学社融合」と「学社連携」の相違点

関わり合う二人以上や機関同士が、主体者A・B双方のめざす目的を果たし、時としてCという全く新しい価値を生むように始めから意図して仕組むことが学社融合の基本である。

学社融合教育の終局の目標はノーマライゼーションのまちづくりである。

その町に住む子どもも大人も、高齢者も障害者も「この町に暮らしてよかった」と実感を味わうことの出来るまちづくりに貢献することが終局の目標である。

3、私のまちづくり実践活動レポート

高齢者は知識経験豊かな社会の人的資源である。

高齢者は人間としての人権を満たされていない。「御用済み」の人間として社会のゴミ扱い
真に高齢者を社会の人的資源として活用する社会的仕組みを組み立てる必要がある。

誰しもが持っている人間としての欲求を認め合える社会づくり

安全への欲求 生理的欲求 社会参加の欲求 自尊心の欲求 自己表現の欲求
このような欲求をストレートに出せるまちづくりが大切。

ノーマライゼーションのまちづくり第1弾！「宅老所：ふれあいの家・さざんか」H10、4
町内のひとり暮らし等高齢者を対象。自立して生活する高齢者の憩いの場を週2回開設。

元気な高齢者で少し弱くなった高齢者の生活を支援する活動を組織。

随時付近の中学校の生徒が訪れ、高齢者と交流...福祉教育学習

仙台市による「仙台市先導的ボランティア活動支援助成要綱」が適用。年200万弱の助成
ノーマライゼーションのまちづくり第2弾！！

社会福祉法人「大樹」設立 グループホーム「ほくと苑」併設

要支援・要介護の方々の利用するサービスセンター・グループホーム

これまでになかった住宅地のど真ん中であるという利便性ととも、施設・設備を含めてノーマ

ライゼーションの精神を貫き通し、中学生・高校生等若い世代との心の交流を活発化させることに視点を置いたことにより、福祉施設として短期間での黒字経営を実現できた。

ノーマライゼーションのまちづくり第3弾!!!「生活支援e まちづくり実証実験」H14・8 高齢者・障害者宅45世帯・地域の商店、医療機関、そばや、理容所、民生委員宅等15ヶ所をLモード電話網で結ぶ。

商店等から全戸に発信 在宅の高齢者・障害者は、Lモード等使って、注文 商店から配達 Lモード電話機の操作指導 学生ボランティア

この実験は運営協議会による(仙台市企画局・NTT・民間企業・大学・市民団体等で構成)

4、最近の宮城県における学社融合教育の実践に向けた流れ

私の永年の持論「公民館は社会教育現場の第一線」と、公民館運営の刷新

平成15年6月6日・文部科学省告示第112号により改定された「公民館の設置及び運営に関する基準」について、文部科学省から見直し検討会委員に選任され発言の機会を与えられた。最近の研修会における公民館設置及び運営基準改正・学社融合教育に関する研修会開催状況

仙台教育事務所管内社会教育主事研究協議会	5月16日	仙台教育事務所
黒川郡社会教育委員連絡協議会研修会	7月18日	大衡村平林会館
学校教育と社会教育との連携推進研修会	7月28日	宮城県婦人会館
宮城県教育委員会主催	8月22日	巨理町中学校体育館

これらの研修活動が、仙台教育事務所をモデルケースとして、県内7つの教育事務所管内全体に波及させ、やがて県内全地域に浸透させるべく努力したいと考えている。

仙台市教育委員会の動き

「ハートフルサポーター」 ノートテークボランティアの導入 ADHD児童への支援ボランティア導入 にこにこ教室支援ボランティア導入

5、まとめ

誰でもが安全で安心して暮らせるまちづくりは、気長な道程を必要とする課題かも知れない。行政と市民の協働体制の下に、新しいノーマライゼーションのまちづくりを目指すには、学校教育を根底から改革し、地域の人々の手で教育を変えることのできる社会環境を実現することである。

インタビューダイアログ(鼎談) 9:30 10:30-12:30

大平光代さん(弁護士、『だから、あなたも生きぬいて』著者)

田上時子さん(NPO法人 女性とこどものエンパワメント関西代表)

油谷雅次さん:コーディネーター(融合研副会長・大阪府社会教育委員)

油谷 今回のフォーラムのテーマ-「ひとり一人の“わたし”が息づく『学社融合』を求めて」。「融合の実践」をみなさん名乗ってきたが、これでいいのか、もっとこうすべきじゃないか、一人一人がもっと考えていこう、一人一人が自ら考え実践していこう、というのがこのテーマの狙いです。

実は「融合」というのはまだまだ(議論が足りず?)「どういうことか、...地域とは何だ、学校とはなんだ」ということを「改めて」考えていく。誰にでも安全でノーマライゼーションされた、コミュニティを求め(それをもとにした)学校像、地域像を見ていく。一人の自分しかありません。そして一人じゃ出来ないことをみんなしてやっていく。これからの融合(の実践に向けて、あるいはこれからの融合研の課題として)、自分たちの持っている一人一人の考えを検証していく(ことが必要である)。

お二人(大平氏、田上氏)は問題のある課題に直面して努力しています。お二人の経緯とかはご存知だと思いますので、知っているものとして進めさせてもらいます。今日は学校関係者が少なく、行政・その他が多いようです。喋り出したら止まらないのが融合研ですが、一人の質問は2分にさせてもらいます。みなさんに伝えたいこと、逆に質問でも、問題提起でもいいです。まずはお二人にお

話していただきます。

大平 皆さん、全国各地から（来たと思います）。私（大平）は大阪に住んでいますが、ここ（野外活動センター）は「大阪」じゃありません（来るのにかなり苦労した（笑））。

弁護士になって7年。非行少年や犯罪に関わっている。いったん非行に走ると立ち直るのに時間がかかる。非行に走る前になんとかしたい。（「走る前」というのはまず）学校に行けなくなる。もちろん不登校＝非行ではないが、この不登校の際、もっと関わる人がいれば（なんとかできるのではないが、ということで、不登校の子や親と関わっている）。1日60通のメールが届く。送られてくる名前を見れば、顔はわかる。

不登校では、親御さんは（以前と比べれば）理解 - 学校に行かんでいいよ - を示しているが、将来への不安を持っている。この不安を解消する相談を行なっている。例えば、英語が得意・好きならば、（学校を経由しなくても）それを伸ばすとか - 通訳とかガイドを資格をとるようにすすめる、実際に4人、資格試験に合格している。このように何らかの方法で手を差し伸べる必要がある。

田上 カナダに18年間いて1988年に帰国した。今はNPO（NPO法人 女性とこどものエンパワメント関西代表をやっている）。本も10冊以上出しているが、大平さんのようにベストセラーの本は出していないので...（笑）。

日本に帰国して、かつて知っていた日本とはかなり違うと感じた。元ジャーナリストとして、その視点で見ると、後でよく分かったのは（日本社会は高度経済成長を通じて）カナダのようになるうとした、ということ。「70年、80年代」とは違う。日本社会への違和感、そのとっかかりは東京・埼玉で起きた連続幼女誘拐殺人事件だった。「子どもたちがSOSをだすやる」という予感があった。例えば薬物とか。そして予期した通り、薬物使用とか増えている。

融合研がどんな会だか全然知らない。（こうして来てみると）予想外に男性が多い。だいたい女性が多い場合が多いのだが。私（田上）は、地域に男性たちが帰れば、子どもの問題は、解決するだろうと思っている。先ほど挙げた連続幼女誘拐殺人事件、あるいは新潟の女子監禁事件、池田小の児童殺傷事件、神戸（「酒鬼薔薇」少年）の事件、どの事件でも「父親」の姿が見えない。加害者はみんな男だが...。母親が子どもを育てている。日本は性別役割分業が強い。（1990年代以降ですらそうであり）そんなことはどの国でもない。そのような意味で、男性が地域に帰ってきて子どもに関わってくると、何かが変わってくると思う。父親（として）じゃなくても男性として関われば（アメリカでいうピック・ブラザー）。融合研は面白いおじさんたちがいっぱいいるようなので、ここで子育ての話をするのは悪くない。

少年犯罪について今日マスコミは騒ぐが、私（田上氏）もマスコミにいたからわかるとして - 量的に言えばそんなに増えているわけではない。ただマスコミが注目して取り上げるものが増えたということ。

油谷 見えすぎている人もおりますが...、大人の姿、父の姿がありますが...、家庭のご体験、地域の体験に焦点（を当ててお話し下さい）

大平 （今の少年の非行は）昔の非行少年とは違う。普通の家庭に育っている。はたから見れば問題のない家庭であるが、中に入ると問題だらけである。普通の日常生活にかなりのずれ違いがある。親がしつけ・教育だと思っていることも子どもから見ると全然違う。（例えばこんなことがあった）ある傷害事件を起こした子の親の話。父親が「お前にまかせているのに、なんだこのザマは」といきなり母親の頬をパチンと叩いた。（このように父親は）いつもいつも「オモテ」ばかり見て、子どもはそれを（見ている、感じている）。いつリストラに遭うかとストレスがあるのはわかるが、ただ子育てというのは、自分の子どもだということ（を自覚して）、普段からの協力関係が（必要である）。

幸せの追求の視点がどこかズレている。父親は「お金」で母親は「いい勉強・大学」。（このように求めているものがズレており）家族がバラバラとなっている。まずそのバラバラに気づいてもらって、どうするかを（家族で考えてもらわなければいけない）。一人だけ気づいたとしてもダメ。弁護士というのはそのパイプ役をするのが主な役割である。本来なら（そうした役割には）近所のオ

バちゃん・オジちゃんとか自然にいたと思うが、プロの手によっている。そんなに堅苦しくなくて（プロがやれるようなことと考えずに本来近所の人がやっていたと考えれば）いいですよ。

油谷 その中で、融合研がやっていることで、それでいいのか（という自問自答がある）。子育ての話が中心ですが、子どもたちの現状は量的には（少年犯罪としては増えているわけではないと言いますが、子どもたちの状況を少し詳しくお話下さい）。

田上 この話なら1晩でも2晩でも話せる。子どもたちの状況はかなり深刻。「ひきこもり」の話。大平さんは少年犯罪の方から関わっているが、どこにも相談相手がいないから電話が掛かってくる。人は「内向」「外向」の2種類に分かれる。「外向」の場合、非行ということになるが、こちらはあまり心配していない。心も体もアンバランスな思春期に起こることなので。葛藤のない思春期なんてないから。そこで発散する（必要性の中に非行がある。つまり一時的なこと）。「内向」の場合、子どもの究極的な表出の仕方としてひきこもりがある。ここでの問題は - 一時的な非行と比べて - 長期化することである。6ヶ月以上家を出ない人が200万人（いるとされている - 推定でしか測れない）。こんなことは日本だけ。その多くは20代30代で、7%は10年以上（ひきこもっているという）。50代の方で子ども部屋をもっていた方はいらっしゃるでしょうか？（たぶんいないでしょう）。そういう習慣がなかった（だが今の20代、30代は子どものときから個室があたえられる環境にある）。ひきこもりは、（家庭外部から対面しようとしても対面できない - つまり対処できない）会いに行けない。親が孤立しちゃっている。そのような家庭も問題である。

田上 200万人のひきこもりがいるということは200万人の母親がいるということである。そうでないと子どもは餓死してしまっているはずだから。カナダなんかだと出しちゃう（だろう。つまり親はそこまで面倒をみないということ？）。子ども観の見直しが必要である。「あの子だったらやる」（といった見方ではダメである）。ひきこもりは普通の子・いい子である。誰がこんなふう育ててしまったのか（親だけの問題ではない・社会の子どもへのまなざしの問題である）。人間、学歴じゃない。（社会において）いい学校・いい大学というメッセージが強烈にある。それができない子どもはひきこまざるを得ない。評価されなかったら学校に行けない。私たちにとって理想の子どもはこんなだということを見直すことが必要である。

大平 親が子どもに「いい子」を要求する。子どもは（それに合わせて）ホメられようとムリをする。できるのなら問題ないが、ほとんどの子がムリをしている。（期待され・要求される）虚像の自分と本当の自分（との間に大きくギャップができてしまう）。このように「あんまり『いい子』を要求しないで」と言うと、「ホメたらいいんですか」と言われることがあるが、それは極端である。（親たちは）塩梅のさじ加減ができなくなってきた。お母さん・お父さんに言いたいのは、地域のオッチャンオバちゃんの知恵をお借りするのが一番だということ。

油谷 （そうしたことは）地域でサポートできる組織・団体があればできるのか、プログラムとかテキストを（つくるなどして）

田上 やるしかないんじゃないか。問題が見えたら動くというのは人間だれしもある。民間にこだわったのは、地域社会が崩壊して、（新たな）コミュニティが必要だと思（ったから）。例えば「公園デビュー」というのがあるが、これは日本にしかない。慣習空間が崩れている。（地域 - 慣習が保たれている空間というまとまりではなく、個々人が利用する施設・機関といった）点と点でしか存在しない。コミュニティ施策が必要である。子どもにとって（生活世界は）家と学校である。そのあいだにあるのは地域であり、そこに「誰がいるのか」ということである。

（そのためにも）拠点が必要である。「場所」があつたらいつでもとびこめるでしょう。何かあつたときに、自転車・徒歩で駆け込めるようなそういう場所。児童館のように（公園デビューに苦労させられるような）親をサポートするような場所。理念（として親をサポートする）だけでなく、実際の場所が必要である。

油谷 場所がなかったら何もできないやんか、ということ。自分たちの（活動拠点としての）問題でもあり、またそうした場所があれば、他の人も入ってこられる。（そうした場所として）学校というのはどうなんだろう。学校というのはこうあるべきじゃないかというのがありましたら...

大平 1日のうち大半を過ごす学校というのはすごく重要である。40人学級だとすると、先生にとっては一人一人の子どもは40分の1かもしれないが、子どもにとっては先生しかいない。（子ども一人一人をきちんと）思いやって欲しい。しかし学校によって温度差がある。

油谷 ここにいる人たちは熱心な人ばかりですが...、過信もありますが...（熱心であるということへの過信？熱心でありさえすればいいということへの過信？）

野沢（私は）不登校の子を支える施設を担当しているから、二人のお話は直結している。不登校の際、だれが一番苦しいかと言えば母親である。父親はそうでもない。「なぜこんなふうになってしまったんだろう」（と母親は苦しむ。それを）地域で支える仕組みをつくっていかうとしている。（その試みとして）教師ボランティアが声をかけあうということをしている。方法としては、対面的にやる、メールなどでやるという2つを考えている。ご経験からご意見を...

田上 文科省によれば高校進学率は97%もありつつ、13万人の不登校の子どもがいる。こんなに不登校があるのに政権が変わらない（のは不思議である）。教育権・義務教育というが、日本では選択肢が学校1つしかない。フリースクールやホームティーチャー（みたいな選択肢もあっていいのではないか）。10人の親御さんで学校をつくれれば国が半分補助する（といったことがあっていい。教育権・義務教育=本来国がやるべきことをやっているのであるから）。行きたくて行っているわけではない。選択肢が1つしかないのは、子どもがかわいそうである。

（そうした施設の運営面に関しては）企画する段階から子どもたちに参加してもらおう。子どもたちを学校に戻すことを本筋（とせず？）、自分で立てることを目的にして、どんなのをやりたいかということから始めたらいい。兄ちゃん・姉ちゃん（不登校体験をしている人とか）、いろんな世代の人たち、社会そのもので学校を作ったらいいのではないか。昔はそのようにあったでしょう。子どもの声をきちんと聞いて。

外国に行くたびに、日本の国ほど子どもが大事にされていない国はないと思う。例えば、イギリスには「キッズカンパニー」がある。これは企業や一般の寄付によって成り立っている。韓国・ソウルにもフリースクールがある。「義務教育」なのだから、学校に行けない子どもを（学校に行かせようとするのではなく）フォローするのは当たり前であろう。それができていないのは恥ずかしいことである。大臣が代わっても変わることがないお寒い状況。

油谷 学校だけが教育ではない、地域もある（ということでしょう）。しかし（地域には）お金がない、だからできないんでしょう。岸（融合研副会長）さんは、お金がなくてもできる、と言います。（岸さんにふる）

岸 この国は...ワイク（車さん：在日3世）に「あなたたち国民は大変ね」と言われる。社会人にならざるをえない。様々な状態を学校の中につくる。現行法の中での「体制内改革」を（私たちは行なっている、目指している）。学校のあり方、それが普通じゃないとしたら、「何でなのか - じゃ直そうよ」というもの。

宮崎 秋津小でも何人かの不登校の子がいた。だけど地域の人が学校に来るようになって、不登校はゼロになった。慰め役のおじさんが学校にいる（から）。他の学校に赴任して（秋津との違いを思うと）「『完璧』でいなきゃいけない」という問題（があるように思う）。（学校側が）心を開く、ということが重要である。

油谷 そのことは学校を開くということに関連することでしょう。情報公開ということに関して、その必要性について...

大平 情報公開すべきである（住民と行政の間の情報の均衡のバランスからしても）。私（大平）は法務省の刑務所改革のメンバーなのだが、密室で行なわれていて、何が行なわれているかが外からではわからない。まずそれを公開（する必要があるが...）メンバーたちには、完璧じゃなきゃいけないという意識がある。わかりませんと誰も言わない。私はメンバーの中でペーパーだが「わからないんです、教えて下さい」というと注目を集める。（皆）知ったかぶり。

田上 「沈黙の文化」というものがある。1988年当時「子どもの虐待がある」と言っても、「そんなのありません」とされた。子どもの名とかも伏せられる。（ようやく）今度の法改正で、プライバシーよりも通告義務が優先されるようになった。事実というのは明らかにしないと目に見えない。元ジャーナリストとして言えば、新聞に報道されない「事件」がどれだけあるか皆さん知らんでしょう。メディアが「事件」だと思わないと取り上げられない。1988年帰国当時はみんな沈黙していた。「虐待はない」「虐待が増えだした」。そんなのはウソである（増えたんじゃないで元からあったものがメディアに注目されて増えたように見えるだけ？）。

今の親へのメッセージというのは「完璧になりなさい」というものである。事件があったりすると（親の「完璧」でないところが挙げられる。つまり）「完璧な親になりなさい」というメッセージをメディアが発信している。それでは子どもが大変である。思春期を乗り越えられない。「完璧な親じゃなくていいんですよ」というのが正しい情報であるはずだが、それが伝えられていない。

車 母親を20数年やっている。（田上さんと同様に日本に？）違和感を感じる。私（車）は在日3世で権利を持っていない。子どもは生まれると同時に権利を持っている。非行に走ったりもしたが、子育ても完璧でないが故に戻ってくる。日本は出生地主義で、ある程度の法制度はあるが、日本の国籍を持ってるか持っていないかによる現状、とくに大阪における現状について（お聞かせ下さい）

大平 在日の友達はたくさんいる。みんないい人たちである。（これが）大阪の状況（である？）。いわれのない差別（もある？）。ほんと大変でしたね。

田上 日本の非行やイジメは陰湿である。日本社会が陰湿だから。カナダにもイジメ・犯罪はある - もちろん陰湿でないイジメなんてないだろうが - 日本ののは特に陰湿である。（その違いは）移民に対する施策の違い（にもあらわれる）。日本はものすごく権威的である。労働にきた人の労働権、人権を保障する、そんなの当たり前なのに日本はそれができていない。

油谷 中国から来た人がいるので。

紀瑞成 大平さんの本を読んですごく感動して、どうしても来たいと思い、大分から来ました。子どものこと、家庭のこと、親として心配することもあります。心かけることは親の義務だと思います。親と子の間でうまくコミュニケーションをとれるか、子どもの成長が目的ですが、対等に、友達のように、お互い応援しながら（いければと思う）。

江口 （私 = 江口の勤める小学校でも？）一人、イジメで転校するということがあった。いじめていた子は「いい子」であった。家事も手伝うし母親からみての「いい子」である。まわりに迷惑をかけない、家庭のことをやる、そんな「いい子」という期待が強いのではないか。そこからの中で陰湿になってしまうんじゃないか。お母さんにもいるんな人がいて、「親にもいるんな人がいるということを理解して下さい」と（私は）言っている。親子で多様さを認められるような機会（が必要である）。

油谷 江口さんの紹介 - 運動会でビールを売るといったことで、融合研のメーリングリストで物議

を醸し出した校長先生 - である。

大平 子育ての仕方について、一般論としては、「問題」の子どもを見ると友達関係になりたいという親が多い。フレンドリーな関係というのはもっと人格形成ができた後のものである。子どもが何のしつけもなしに育ってしまっている。(それではいけなく)権利と義務とか、当たり前のことを教える。子どもがいけないことをするのは当たり前、それで叱られる、よし悪しを教えられる。

いじめっ子は、スポーツが出来たり、成績が良かったり「いい子」である。90%ぐらいがそうであろう。それは「いい子」のフリをしているだけ。やはりお母さん方にも問題がある。(親たちにも)カウンセリングを受けてもらう。(母親には子育てに関して)親族から受けるプレッシャーがある。それが子どもに向けられる。親のカウンセリングが必要である。

田上 子育てに関しては、10冊ぐらい書いているので、読んで下さい(笑)。学校にいる方は気づいていると思うが、30代40代の親の「足腰」が弱い。「完璧」を求められ(るが、それができない)自分に自信がないからである。「母親」「父親」の役割というのは日本だけである。外国では親の役割としかされない。「いい子」というウラには「完璧な親」というのがある。誰にとつての「いい子」なのか? - 「いい人」っているでしょ、友達にはなりたくないけど -。「いい子」というのは親の言いなりになっている子である。子育てするには楽であろう。親の言いなりになる子は暴走族の言いなりにもなり得る。つまり自己決定の習慣がないのである。自分の感覚で決めることができない、というように「足腰」が立っていない。

30代・40代の人たちは、生まれたときから「豊かな」国に生きている。またTVがあるとないとでは全然違う。さらに(この世代が子どもころから)「個食」というあり方が出てきてもいる。心が育てられていない。モノがあふれるほど、子育ては難しくなる。「こんな親に誰がした?」という社会がある。遊びが少なく、勉強やスポーツ以外のところで評価されてきていない(人たちである、30代・40代の親たちは)。昔は、親の背を見て子は育つといった。しかし現在は環境が悪い(から)、立ち向かうことが必要なのに、それを経験していない。過干渉か放任か(になってしまっている)。問題があるなら、カウンセリングで、親とは何なのかを学習することが必要であるが...(まだそういうふうにはなっていない)。

子どもの問題はコミュニケーション不全の問題である。子どもが語ってくれるのに2年かかる。子供自身、自分が何を求めているのか語れないと(子ども自身もそれをサポートする側も)何もできない。また大人同士のコミュニケーションスキルも上げなければならない。確かに「57」才の体験からすれば、「17」才の体験は幼く見えてしまう。しかしそれではコミュニケーションは対等にならず(うまくできないことになる)。親が子どものレベルまで下りていけば(下りていけば)、いいのである。「57」才の私はとりあえずおいておいて、子どもの話を聞く。子どもが思春期になって(から)、お父さんが関わろうとしてもムリである。早いうちから時間の量ではなく質としてコミュニケーションをとっておくと、子どもが思春期のとき役に立つ。親は自分のしたい話があればそれは妻なり・夫なりにすればいい。(子どもとの会話では)子どもの話を聞く、じっくりと聞く、そして「共感」する。子どもの「依存期」において「私は絶対に見捨てられない」という確信を子どもに与える(ことが重要である)。

油谷 どっちかの立場(親・子)で話をして、その利害で話をしてしまう。(利害だけではなくそれは)「私のやっていることは正しい」というのと同じであろう。そうしたことは30代・40代だけでなく、我々も同じようなことがあると、今聞いていて思った。(田上さんの)本を買って下さい。もっと現場の人、先生方、何か質問を...

?? 大平さんの生き方を変えた原因・きっかけをお聞きしたい。

大平 自分の人生こんなもんじゃなかった。暴力団にいたときも - 普通の家庭で育てられたので - やっていることも悪いとわかっていた。だけど自分ではどうしようもなかった。警察(が何かいったとしても)「何ノーガキ言うとなねん」(としか思えなかった)。養父のオッチャンとの再

会、人間として扱ってくれる。宅建の資格を取ろうとしたときも、こんなのやめたる、と何度も思っていた。しかし周りの人が自分の過去をわかっていながら、「まけたらアカンで」と支えてくれた。条件つきで支えてくれたことは（それまでに）あったが、そうではなく無条件で支えてくれた。

子どもたちは、大人が思っている以上に大人のことをよく見ているし考えてもいる。保健室登校について「なんで（保健室で受けるのか、保健室に行けるくらいなら教室に行けばいいのではないか）」というような発言があると「行けるものなら行っている」と子どもからメールがくる。私（大平）は（そうしたメールに対して）アドバイスとかはしない。まず共感 - 「ホンマはらたつ」 - する。その後先々週（9・30 当時からみて）『サンデー毎日』に（大平さんに対する）バッシングの記事が掲載された。私（大平）の子どもを使って、半ば恐喝 だから毅然として子どもに会わなかった でそのことで取材。そうした記事のため、子どもたちが離れるんじゃないかと危惧したが、みんなから「負けたらアカン、ガンバレ」と（メール？が）来たので、嬉しかった。（田上さんから、「ジャーナリストはしつこい」「関わり合わないこと = 賢明」との感想アリ）

ヤマウチ 監視カメラの話（「踊る大捜査線 - 足を使って情報を求める」）。防犯に関して、犯罪を未然に防ぐために監視カメラを設置するという議論があるが、子どもたちを24時間監視するというのはどうでしょうか？。私（ヤマウチ）は監視カメラはない方がいいと思う。（それよりも）子どもに気ばたらきをするこのの方が大事であると思うが。

田上 （監視カメラ設置は）知恵がなさすぎる。どうして被害者をつくらないことばかりで、加害者をつくらないことに目を向けないのか。それではダメでしょう。監視カメラにお金をかけるくらいならば……。子供は大人の見ていないところで育つ（「悪所」とか言われるところ - でも必ずしも「悪所」ではない？）。事件もまた（そういうところで起きる場合もある。とすれば監視するのではなく）、自分で自分のことを - 身を守ることがあるでしょう。地域で見守るとかいうこともできるか（もしれない？）。池田小のような事件でもわかるように（監視カメラをつけたとしても）閉じても閉じても入ってくるものは入ってくる。とするれば、人の目で監視する。それの方がよほど人間らしい。こうした加害者というのは「確信犯」であるから（やることは決めていていつ・どう・やる・やれるかの問題となっているから）人の目があればできない。こちらの方が賢明であろう。

大平 「安全」に関してもそうだが（その他のことでも）戦後50 数年で今現在のようにになっているのだから、一昼夜でできることではない。幸福追求の接点がどうもズレているような気がする。学校自体がそうであるが、「横並び」というものがある。しかし、思っていることが違う、様々な考え方が違う、そのようになって当たり前なはずである。そういう姿勢が重要で、それを広めていくことが必要である。地域の色々な人と出会うこと（というものと同義なのかもしれない？）。

油谷 融合研 - 同じような人たちが集まって、やるだけではあまり意味がない（融合研のように集まるのは意味がない、そういう段階は過ぎた？、あるいは融合研はそれでは意味がないと自覚して、色々な人が集まっている？ - 多分前者）。来れない、できない人たちとも一緒にやれたらなあ とどこまでできるかわからないが そんなことを考えている。

今回融合研フォーラムが大阪で開かれました。大阪は特異な場（在日・部落の問題も内包した）であることは理解していただいたでしょう。20年、50年と続いてきている。ここでやるしかない 対立するのではない、一緒にやろうということをやっているのだらうと思います。テーマはみなさん個人個人で持って行って欲しいと思います。

最後にこれだけはお願いしたいということをお二人からお話し下さい。

田上 「これだけは…」と（言っても15年間、日本でやってきたわけで）これだけという万能薬があれば逆に（聞きたいが）、少年犯罪を防ぐ特效薬があるわけじゃない。私（田上）ができること、皆さんもそれぞれできること、違う分野でもひとつの（同じ）志を持っていると（思う？。それは）親に対しても子どもに対しても、「孤立させない」ということ、つまり育児の社会化というもので

しょう。そのためには3つのキーがあって、正しい情報を与えること（メディア・事件にならないニュースを伝えていく）、コミュニケーションスキルを提供（スキルとはテクニックとは違うもの、虐待をしてしまう接し方というのは、この点（スキル）からすれば多くの親が潜在的に持っている）。そして サポートを提供。みなさんの活躍を期待しつつ、終わります。

大平 ひとり一人の力は微々たるものであるが、合わせれば…。パスポートを持たないで入国してきた外国の人も、強制送還されることによってどうか日本の国を嫌いにならないで欲しい。（また同様に）子どもたちが日本を見限ってしまうことだってあり得るでしょう。今（の日本社会と言うの）はそういう状況。「日本もいいところだ」と最終的に思ってくれれば…。私（大平）も微力ながら皆さんと力を合わせて、将来幸せに自立できるようにと思っている。

以上 記録者 No.87 永谷貴弘（文責）

校正 ; 宮崎稔

融合フォーラム2003in大阪

第1分科会記録

司会：第1分科会は他の分科会と趣を異にする。大阪の元気さをアピールするため、地域コーディネーター連絡協議会が主催する。

渥美：すこやかネットが府下の中学校区で実施されている。地域コーディネーターを1,000名養成し、多くの方が活動されている。連絡協議会が結成され活動しているが、大変重要なことと思っている。私は、心理学の出身。神戸の震災のとき、多くの方が学校へ駆け込んだ。いろいろな活動がいざというとき役に立つ。平常時のつながりが大切だと思っている。楽しさが強調され、意義が見失われつつあるとも思うので、いざというときの話もさせてもらった。

明貝：この分科会は協議会が主催。334府下中学校区に地域教育協議会が設置され、地域コーディネーターが配置された。5年間で1,000人を目標に養成している。全30時間の講義を受ける。それを受けると地域に帰る。これまで地域で活動している人はすぐに活動できるが、そうでない人はどうしたらよいかわからない。そういう声を受けて連絡協議会を立ち上げた。平成14年度から動き出し、15年度に会則役員が決まった。地域が抱えている悩みや知ったり、成功した例を知ったりできるということを呼びかけている。地域コーディネーターがいても、働き場がないという現状もある。うまくいったところはどのように入っていったのかといったことなどについて、情報交換している。

田尻町では平成13年度に立ち上がった。現在エコマネーに取り組んでいる。まず自分のことで登録してもらい、エコマネーをもらい、自分が困ったときにそれが使える。地域の方が学校に入ってもらうきっかけになればと思い始めた。老人クラブの方などは、エコマネーはいらないから毎週学校に活かしてほしいという声もある。総合型地域スポーツクラブが構想されているところであるが、学校開放で子どもにニュースポーツの指導もしている。今回は関西大会で優勝した。地域に在るものをいかにうまく使うかということではうまくいっている。連絡協議会としてアンケートをし、資料集を作成した。これまでも情報収集・発信をしてきたが、府下全体でとりくみができないかという話があり、府の夢銀行という取り組みに注目している。府下全体で取り組めば大きなものになると思う。

渥美：地域の教育資源の活用、行政施策の活用などがキーワード。エコマネーは地域通貨とも言われ

る。顔は知っているが、話をしにくいというところではいいきっかけになるかもしれない。

井戸木：みなさんは119番に電話をかけられたことがあるか。多くの人がパニックになる。心肺蘇生法もすべての人が知っていれば、救命率があがる。119番でも手順を説明し、救急車が来る前に蘇生させるように取り組んでいる。

平成9年度PTAの役員を1年間やった。そのときは教育に関する知識はあまりなかった。平成11年度には地域の子ども会の役員をやった。そこで、目覚めた。子どもたちの意見を聞くと、大人も人の話を聞いていないと言われた。国会中継を見てのことだ。大人がきちんとしていないのに子どもに言えるか。大人がしっかり学んでいかなければいけないと思った。娘が中学生になって、またPTAを引き受けた。和泉市のPTA協議会で「PTA指導者の手引き」といういい資料を見た。いろんなところで話したが、知らない人が多かった。勉強することが大切だ。次に実践だ。広報も大事。口コミは効果がある。

夜間巡回にも取り組んでいるが、まちの昼の顔と夜の顔は違う。腕章をつけて目立つようにやっている。子どもにも考えさせようということで意見を聞くと、拍子木を鳴らしたいということだった。11月9日からはびを着て、子どもとともに夜間巡回をする。危機管理は大切だ。事件・事故の被害者は社会的弱者が多い。明石の花火事故、先日の琵琶湖のヨット事故もそう。社会的弱者を守るのは大人。大人がしっかりしないといけない。

渥美：大人こそ学ばなければならないというのは、そのとおりだ。最近ではインターネットでかなりの資料が見られるようになっている。

地域教育協議会が、それぞれの地域でできてきているが、口コミは大事だ。

まちを見る時、昼だけでなく夜も見なければいけないというのもそうだと思う。また、高齢者や障害者の視点で見ること大切だ。

夜間巡視の取り組みで、子どもの参加も興味深い。

石崎：松原4中の地域教育協議会の会長をしている。松原市は人口13万人のどちらかといえばベットタウン。すこやかネットの先進都市といってもらっている。なぜ、松原市が先進地となったかと言えば、地域が行政を動かし、地域を支援するという形が取れたから。青少年対策は、行政や学校主導が多いが、松原は地域主導型で、行政は地域を支援する形だ。

20数年前から、育成協が立ち上がってきた。府が地域教育協議会を立ち上げたときに、育成協が地域教育協議会へと変わっていった。7~8年前、育成協への市の補助金が打ち切られたことがあった。解散というところもあったし、自分たちの力でがんばろうということもあった。河内音頭が途絶えていたので、まつりをやろうと寄付を集めにまわったが、学校は協力できないということだった。そのようにして7中学校区中、5中学校区は継続してがんばった。市はほっておけなくなり、補助金が復活した。これまでは、学校+PTAが主導権を握っていたが、地域でなんとかしようというパワーがついた。

地域は独自性が強い。ライバル心や競争心を持って続けてきている。

フェスタでは、参加するだけではもったいないということで、いろんな人が交流してもらう取り組みに力を入れている。

渥美：活動の一つ一つに知恵がある。ぜひ交流の中でつかんでほしい。参加してもらうだけでなく、交流してもらええる仕掛けづくりもいい。

水谷：豊中市は人口39万人、全国でも豊中市だけに各小学校区に公民分館があり、地域の人をつながりの場を作っていこうとしている。泉丘小の中にコミュニティルームがあり、学校と地域が一体となった活動を展開している。41小学校18中学校ある。40の小学校に分館がある。若者たちは地域の中から姿を消し、どこへ行ってしまったのだろうか。20歳前後の若者たちが関わっている地域活動がどれくらいあるだろうか。そんな状況の中、若者が加わることでもっとよい活動ができるのではないかと考えた。荒れた成人式の様子の報道を見て、これで大

人になっていけるのかという思いを持った。地域の中で若い人の力を発揮してもらいたいという思いと、顔の見えるところで20歳のお祝いをしてあげたいということで「20歳のつどい」を始めた。中学校へ行って同窓会の幹事に呼びかけたが、来てくれたのは幹事長一人だけ。どうして、地域のおっちゃん、おばちゃんがぼくらのつどいをしてくれなあかんねんということだった。だから、1回目は地域主導でさせてもらった。それでも56人集まってくれた。

つどいのボランティアの参加を呼びかけたら、70人くらい集まってくれた。2~3回目も同じようにやった。卒業生200人の内、118人、131人と参加者も増えていった。参加してくれる先生方の数も増えてきた。これまで中学校の体育館は使えなかった。体育館で飲み食いすることに難色を示していたが、3回目は体育館を使わせてもらった。しだいに輪が広がっていった。毎回アンケートをとっている。「地域のあたたかさを感じた」など、勇気づけられる声を届けてもらった。ケーブルTVも放映してくれた。4回目は、そのTVを見て、何かしなければいけないという思いの若者が実行委に集まってくれた。力強い若者の姿を見ている。地域での若者の姿は違う。責任ある行動をとってくれる。血の通ったつどいだ。障害のある人が集まりやすいことも大切だ。その人の様子を小さいときから知っている人たちばかりだから安心だ。毎年対象が変わるし、心配もある。学校と地域の思いがずれることもある。なんで20歳にもなって、地域の人たちにやってもらわなあかんねんという意見もある。いろいろ話をしながら、埋めていきたいと思っている。この取り組みはすこやかネットの延長線上と考えている。すこやかネットと発展的につながればと思っている。

渥美：地域教育協議会は、0~15歳を地域で育てるということだが、その後もずっと見ていくということは、すこやかネットの延長線上にある。

おせっかいということからつながっていく。若い人が地域で見せる顔が違うというのもうなずける。地域への愛着もこういうところで生まれてくるものと思う。

横山：子どもたちの遊びも変わり、大人のつながりもなくなった。小さなところから取り戻したいという思いで、ピオトープづくりをやった。個人で始めた。最初ピラを400枚、マンションなどに配った。その結果、70数人集まって、月2回ピオトープづくりをやった。

千里2小で土曜日にゲストティチャーによるチャレンジディーが始まり、私も参加した。土曜日がなくなるので、月曜日に変更になった。月曜日だと参加できないので、土曜日にチャレンジディーをやることにした。子どもたちは200名くらい集まる。子どもの発案も入れながらやっている。学校は、校務分掌をおいて窓口を作ってくれている。

学校とは施設利用要領を作って、それを互いに締結している。今年は青少年対策委員会にあいさつがなかったということで、学校を使わせないと言われるようなことも起こった。

地域教育協議会は、お金をどう使うかの発想から始まったところもある。我々の活動が主催事業なのか、支援事業なのか、位置付けをめぐって混乱はある。囲い込みの発想が多く、対等のネットワークという考えになっていない。協議会の役員の選出方法も当て職や指定席になっているなどさまざまな課題がある。

渥美：ピオトープを作ることが仲間作りのきっかけとなっていることや、それを一人で始められたという点は、大変評価できる。地域や他団体との関係で苦労されていると感じた。

【質疑】

(質問)：行政に積極的に取り組んでほしいと思っているが、そのあたりはどうか。

石崎：市がサポート、支援する形になっている。7校区独自にやっている。逆に我々に働きかけもされている状態。

(質問)：地域教育協議会に応募してきた人が入れないということだったが。

横山：自治会に入っている人、学校に子どもが通っている人には情報がいく。自治会に入っていない人が増えてきている。そういう人たちは若い人たちが多いが、そういう人たちを含めて地域だ。そういう人たちともつながっていくことが大切だ。子縁ということはよくいわれるが、自治会

に入っていない人も参加できるような形にしていきたい。地域教育協議会の規約検討委員会ができ、検討していくことになったが、私は入っていない。

(質問)：みなさんの活動を支えるエネルギーとなるものはなにか。ぜひ、聞きたい。地域で子どもを育てるといふとき、どんな子どもを育てたいという目標はあるのか。それに向けてどんな話し合いをしているのか。

石崎：青少年指導員もしている。近所でやかましいおっちゃんになろうと努力している。地域で子どもを育てていこうという姿勢はある。

井戸本：父をはやく亡くし、新聞配達をしていたとき、一人のおばさんが「ご苦労さん」と声をかけてくれ、あめをくれた。そのあたたかさが心にしみた。人間は苦労しなければいけない。その姿を子どもが見ている。人と会話することがパワーになっている。

水谷：目標を意識しすぎると、事業が死んでしまうことがある。目標は設定するが、人とのふれあいの中で生まれてくるものもあると思う。

(質問)：小学校区のコミュニティルームをやっている。中学校区での広がりを作りたいと思っている。大阪は中学校区での取り組みが多い。わが町がどれだけ元気になるか、その中で自分がどれだけ元気になれるかと思っている。中学校区では行き詰まりを感じている。

井戸本：中学校区では縦のつながりができる。小学校の子どもは、ややもすると中学生に対して怖いというイメージを持ってしまう。地域教育協議会の中で、小学校の情報も入れている。

横山：私は小学校区でやっている。子どもたちの生活圏は小学校区。

渥美：必ずしもこうでなければならぬということはない。

横山：いろんな自分に気づくことができる。子どもに、私が子どもに返って喜んでいられるといわれた。

水谷：地域の学びマップを作った。危険箇所も入れて子どもにも知ってもらおうとした。私もいろんな方からエネルギーをもらっている。

石崎：最終的には好きだからやっている。開かれた学校づくりというが、まだまだ開かれていない面がある。ガードはまだ固い。

井戸本：昔の人はボランティアという言葉は使っていなかった。自然に助けあっていたのではないかな。

明貝：ありがとう、楽しかった、今度もやってという言葉をもろうとき、感動がある。大人が楽しんでやっている。好きなことを見つけられる人間、喜怒哀楽を感じられる人間になりたい。

渥美：今日はうまくいっているところの代表的な事例を出してもらった。うまくいっているところも、次のステップをどうするかが課題だ。

(文責 山崎)

第二分科会「公民館が発信する町づくり」

参加者は10名ほどのこじんまりとした分科会である。時間いっぱいをつかって貝塚市の公民館活動やそれをベースにした子育てネットワーク等の自主学習グループの発展について報告がなされた。

和歌山大学の山本健慈教授のコーディネートによって分科会がスタートしたが、最初、参加者が自己紹介する時間をもうけ、貝塚の公民館活動のどのあたりを聞きたいか、意見をかわしあった。

そうした意見をもとに、まずは貝塚市浜手地区公民館の館長である岡野智子さんが、埋立地につくられた新しい町づくり(パークタウン)と連動してすすめてきた公民館活動のあゆみをお話された。

貝塚市には現在(中央・浜手・山手)の3つの公民館があるが、中央公民館の建設以降36年間にわたって、1市1館の体制で活動をすすめてきた。市内全域を対象エリアとするため、「地域にねざした」活動が必要だとの認識がありながらも、個々の具体的な地域のニーズや課題に対応した取組みにはなりにくい実態があった。そうした状況のなかで、浜手地区、山手地区の二地域に公民館が建設され、より「地域にねざした」取組みへシフトしていったという。

平成元年のパークタウンの町びらきとともに開館となった浜手地区公民館では、職員が住民と積極的に会話をし地域のニーズや課題をききつつ、さまざまな事業をすすめてきた。さまざまな講座や子育てや町づくりの学習の場が開かれると同時に、小中学生の自由な集まりと遊びの場にもなっている。まさに、パークタウンにおける地域づくりの基地の役割をはたしている。

報告者のひとりである貝塚市教育委員会の村田和子さんは、岡野さんの先輩であり、公民館の仕事がしたくて大阪府貝塚市にやってきた方である。村田さんは、貝塚市の社会教育活動の歴史をふりかえりながら、市民が互いに交流し、市民としての力をつけていく場としての公民館がすすめてきた取組みを紹介した。

そうした、市民に「市民としての力をつけていく」取組みのひとつが、自主学習グループの育成である。こうした自主学習グループの例としては、「子育てネットワーク」「つるかめ大学」「安心して老いる貝塚連絡会」などがある。今回は、貝塚市子育てネットワークの代表である沼野さんが、その活動について具体的にお話された。子育てについての話合いや講師を招いての学習もネットワークの活動の重要な部分であるが、貝塚市の子育てネットワークの場合、そうした親たちのつながりをベースに「プレイパーク」の活動や、小中学校の総合的な学習へのサポートなど、学校へのかかわりや地域の遊び場づくりにも活動が波及している。こうした子育てネットワークの活動展開について、沼野さんは、村田さんたち公民館職員のバックアップがなにより大きかったとお話された。「最初は、会議の進行なども手取り足取り教えてくれた。そして子育てネットワークが自立して活動できるようになってからも、なにか取組みをすると公民館の職員はほめてくれ、課題に直面したときにはいろいろと相談ののってくれた」と沼野さんはいふ。

こうした公民館発の活動が、より地域を土壌として芽吹き結実した取組みが「北校区ふれあいルーム」であった。小学校の余裕教室を利用した地域の生涯学習ルームであるが、ここを端緒として、さまざまな学校と地域の活動の融合がすすんでいったことについては周知のとおりである。

「ふれあいルーム」の活動やこれが成立した経緯については、村田さんと沼野さんが、それぞれ公民館と市民の立場から説明された。それまであまり接点のなかった地域の婦人会や老人会といった組織と公民館ベースのグループが協力し、ともに地域の子どものために何かできるかを考えていくような体制ができたこと、またこうした拠点の成立には、行政と市民にそれぞれ強力なキーパーソンの存在が不可欠であったことなどが報告の中ででてきた。

実際、学社融合にしても、コミュニティづくりにしても、その核となるのはアイデアと実行力、そして多様な人のつながりをもったキーパーソンである。コーディネーターの山本健慈教授は、「これからは学校の教師も、行政職員も、保護者も、地域にすむ一人一人が、町づくりとそれにつながる自分のあり方を語れるようにならなければならない」とまとめの中でお話された。そのような地域をベースにした教育活動を支えるキーパーソンが、自然と育っていくような土壌が貝塚の公民館活動、社会教育活動であるといえよう。
(記録；濱元伸彦)

第3分科会「秋津野塾（和歌山県田辺市上秋津野）のトキを越えての

自主・自律(立)のまちづくり実践」 報告

この分科会では、コーディネーターの堀内先生のもと、参加型の運営ですすめられました。まず、ビデオを見て、参加者27人が自己紹介を兼ねた1分スピーチ、次に上秋津公民館長の玉井さんと直売店「きてら」代表の原さんにお話いただきました。その後は融合研の岸 副会長のお話や参加者との質疑応答が行われました。

《ビデオの概要》

秋津野は和歌山県のちょうど中央くらいに位置しているまちです。

昭和31年に5つの村が合併したときに、村有財産をどうするかを検討したときに、「個人に分配しないで将来を担う子どものために使おう」ということで、社団法人 上秋津愛郷会をつくりました。これがまちづくりの財源となっています。

もうひとつ、平成元年に住民の誰でもが入れる組織として「上秋津を考える会」を作りました。

この2つで「行政に頼らない独自のまちづくり」の基礎ができました。

平成6年に「秋津野塾」ができました。これまでは各町内会それぞれで動いていましたが、24団体が加入して「秋津野塾」として1つにまとまり、月1回の会議を開いて連携をとる中で、地域の各種イベントが活発になってきています。

平成8年に「豊かなまちづくり全国表彰事業」で日本一の天皇賞を受賞したことは、大変励みになっています。

現在、塾では「活動とうるおいのある郷土づくり」を目標に、コーラスなどのサークル活動や、花祭り、夏祭り、登山マラソンなどの行事、高齢者のための「いきいき健康増進」など、多彩な活動に取り組んでいます。

学校との連携としては、「農業体験学習」として、老人会の協力で3・4年生は野菜づくりに、JA青年部の協力で5年生はみかんづくり、6年生は梅づくりに取り組んでいます。子どもの体験活動をすすめたいという学校の思いとJAの思いが一致することで、忙しい時期においても時間をやりくりし、ずっと続いています。

直売店「きてら」は、平成11年度に地元の有志が10万ずつ出し合って立ち上げました。農業は今、非常に厳しい状況にあるため、品種や技術面だけでなく、販売も大切と考えたのです。これにより、地域の産品の掘り起こしもでき、地域の高齢者がいきいきしてきています。

現在、

和歌山大学の協力のもとマスタープランづくり

移転する小学校の跡地利用を行政と話し合い

に取り組んでいます。

公民館はコーディネーターとして、まちづくりに大きな役割を果たせます。

《参加者からの主な質問と回答》

Q1) 「女性の関わりが見えないがどうか？」

Q2) 「学校の協力の姿勢はどうか？」

Q3) 「どういうふうに『人づくり』をすすめているか？ また、新しい住民との関係はどうか？」

A1) 「女性の団体を再編して、自ら積極的に参加するようになってきています」

一方で、堀内先生から「女性自身の参加の意識作りも必要」との指摘もありました。

A2) 「当初は、地域 対 学校という向かい方をしたので、学校はこわがっていました。今は、田辺市教委に学校と公民館の融合の思想があって、話し合いの場が定期的にあるなど、話がしやすくなっています」

A3) 「『人づくり』については、コーディネイト役として、たえず気をつけています。たとえば、学校から『地域の方を紹介してほしい』と依頼があれば責任をもって推薦できるよう常に考えています。まちづくりの先輩の方々にどう力を発揮してもらうかで、出番づくりに配慮しています。マスタープランづくりも少人数にしぼらず、作る過程を大事にして、それ自体が人づくりと考えています」

「新しい住民も、『上秋津を考える会』に参加し、そのことを契機に子ども会など、どんどん地域の組織に参加してきています」

《岸 融合研 副会長から》

上秋津は学びを核にして一人ひとりの「私」が息づく学社融合のまちづくりをすすめておられ、大変すばらしい。

ポイントとして、

公民館で趣味の教室をするとか、完全学校週5日制の受皿づくりをするというのが本来の社会教育ではないということ

まさに「生きるために学ぶ」ということが生涯学習で、子どもから高齢者まですべての住民が学びの主体者で、学校教育はその一部であるということ、学社融合は目的ではなく手段であるということ

「生涯学習のコミュニティづくり」が、学社融合の目的のひとつで、どこのまちも人も最初から「オンリーワン(only one)」で、他の実践を参考にしつつ、そこからクリエイティブしていくことで自分たちのまちづくりをすすめていければよいことあり、その中で「つなぐ」という役割がキーワードになります。

《堀内 先生から》

学社融合とは、学校教育と社会教育との融合という狭義の概念ではなく、「まちづくり」なくしてはありえません。

「まちづくり」とは・・・

住民のすべてが安全で安心して、そこで暮らせること

人間らしく生きるということ

「住んで良かった」を未来につなげるということ

「まちづくり」のためのポイントを8つ紹介

官主導 から 市民主導へ

まちづくりは、ハードとソフトの統一物であること

生活を楽しむ

共同のコミュニティづくり。違いを認め合うということ

人が育つまちづくりをすること

自分が今いる小さい単位の地域を住みやすくすること

地域の資源は人も物も最大限活用すること

実践可能な行動計画をつくる

(最後に、裏話として・・・) 「ここの公民館はなぜ、まちづくりのセンターになりえたか？」ということですが、公民館長の報酬は大変低いのですが、「地域の人が地域の公民館長を選べる」という制度がすごい！ 玉井さんという、ここで生まれ育った人で、まちを愛しておられる人だからこそできるのです。

また、原さんは、宮沢賢治の思想にも造詣が深く、文化人でもあり高い生産技術ももっておられる方です。

最初に上映されたビデオも、全部地域の方が自力で作られました。「地域に役立つ人を地域が使える」かどうか、大きなポイントです。

以上、参加者皆が元気の出る分科会でした。もりだくさんの内容でしたが、翌日の分科会報告に合わせて、短くまとめさせていただきました。(文責 渡邊)

第4分科会 はじめての学社融合

コーディネーター； 宮崎 稔(融合研会長・千葉県習志野市立大久保東小学校校長)

進 行； 江口 勝善(千葉県鎌ヶ谷市立初富小学校校長)

はじめに【宮崎 稔】

* Win&Win! とは、「学校も地域もどちらも勝つ、得していく」という意味

* 連携と融合の違い

「連携」；連携というものの、今までは、学校にとって都合のいいときに、都合のいい頼みを地域にすることが多かった。学校主導型。

「融合」；どちらか一方だけが得するのではなく、共にメリットがある。計画段階からお互いの思いを出し合い、成果と同時に責任も共有する。

* 広義と狭義の学社融合

狭義の学社融合の例；学校教育の総合的な学習の授業場面における地域人材の活用
地域の人にとっては、生涯学習の機会にもなる。

社会教育では、中学生が公民館で大人や中学生と一緒に自分で選んで講座を受ける。

広義の学社融合の例；学校施設を核として、授業に限定せず、子どもをキーワードとして、学校と地域がお互いにメリットを共有する。

まちづくりへと発展していく。

事例発表

静岡県

【静岡県富士宮市教育委員会生涯学習課長 渡邊 喜久】

【静岡県富士宮市立大富士中学校PTA顧問 城 佐知子】

* 「学社融合とは生涯学習推進の唯一の手だて」

* 富士宮市の取組み

学校・社会教育融合事業

- ・ 学びの成果の社会への還元の実業化
- ・ 公民館で学んだ人が、学校へ出向く
- ・ 学校が公民館に、どんなことをしてほしいか、どんな人材を捜しているのかを伝え、公民館が紹介し手続きをする。

職場体験・講話

学校開放講座「地域がつくる市民講座」

- ・ 学校が公民館的機能を持つ。
- ・ 教員による夜間講座（旅行に役立つ英会話、テニス、登山等）

読書と読み聞かせ推進事業

- ・ 高齢者にまで拡大
- ・ 読み聞かせボランティア全国大会

学校施設（体育館、グラウンドを除く）開放

学社融合を支える富士山まちづくり出前講座

- ・ 講師派遣課の講師による出前講座

地域行事を支える生徒会（地域生徒会）

- ・ すぐにできる効果的な取組み

青少年が参加するまちづくり（パソコン教室）

- ・ 中高校生が高齢者にマンツーマンで手ほどき

総合学習としての富士山学習発表会

* 学校と大富土地域学習センターとの連携

- ・ 中学校内の2教室分を利用して設置
- ・ 不登校の子どもに声をかけることから始め、登校でき笑顔を見せるまでになった。
- ・ 当初は学校の協力を得にくかったが、学社融合の成果が出てきつつある。

東京都

【東京都教育庁生涯学習スポーツ部計画課 梶野 光信】

【東京都足立区地域教育サポート・ネット 堀越 幾男】

* 大阪の「すこやかネット」をモデルにした「地域教育サポート・ネット」

事業化の背景

- ・ メガロポリス（都民1200万人）の中での地域コミュニティをつくる難しさがある。人工の流動率も高く、おらが村の学校という意識に乏しい。
- ・ 教員にも抵抗感がある。総合学習をきっかけに、地域から学校支援の声があがったが、学校のニーズと合わない。
- ・ 「学校完全5日制」「総合的な学の時間」への対応、学校教育法・社会教育法の改正をきっか

けに、大阪府をモデルとして事業化する。

事業のしくみ

- ・区市町村補助事業（都補助1/2）、1地区あたりの事業経費1,000～3,000千円
- ・モデル5地区（杉並区、板橋区、足立区、立川市、小平市）

モデル地区での取組み

- ・杉並区；学校教育コーディネーター制度
- ・板橋区；ボランティア団体が窓口となつての学校支援
- ・足立区；学校と地域の双方向の支援、協働
- ・立川市；青少年地区対策委員会を中心に、土曜等のホリデースクール
- ・小平市；校長が中心となつた「学校支援ボランティア養成講座」

【コーディネーター 宮崎さん】

* 学校を開きたくないという本音が教員にあるのではないか。

【千葉県 江口さん】

* 地域とのかかわりは、よけいな仕事と考える教員が多い。

* 小学校4年生の「よさこいソーラン」の取組み

- ・地域の人々の指導で、子ども・親に中学生も参加
- ・取組みを通して、教員もそのメリットを実感

* 図書館ボランティアが、季節ごとの模様替え

* 行政主導で一律に学社融合をすすめるのではなく、実態としてできている学校をサポートする姿勢を求めたい。

【札幌市 久川さん】

* 学校図書館の開放

- ・1校平均50人のボランティアによる、地域に根ざした学校図書館の運営をしている。
- ・教員はひきこもりがちだが、校内に拠点を置き、授業の支援等から始めている。

【千葉県 江口さん】

* 教員は融合のうまみをまだ知らない。

【コーディネーター 宮崎さん】

* 習志野市立秋津小学校では、8年間不登校生がゼロ。そんなうまみを見せていくしかない。

新潟県

【新潟県市振小学校PTA 和泉 裕一】

* 全校生30人の規模を強みにできる取組みを考えている。

* 子どもにかかわって、自分自身が変化した。

- ・PTAで父親が集まることによって、新たな大人のつながりができ、「地域の子どもの顔が見える場」ができた。
- ・会合の内容を家庭でも報告する。家庭内融合。

* 市振小学校の岸壁壁画の取組み

- ・資金面は、町のまちづくり事業で調達

* 中学校のPTA

- ・くじやじゃんけんに負けた者の集まり
- ・まずは、クラス内の親との交流（バーベキューなど）をきっかけとして「親の顔が見えるクラスづくり」をすすめたい。

【高知県 安養寺さん】

* PTA5人が集まり、「元気になるう会」をつくり、ポスター1枚を貼って、花火を持ち寄って楽しむ会を実施したが、予想より多くの人が集まり、子どもからお年寄りまでが一緒に楽しめた。

【コーディネーター 宮崎さん】

* 仕掛け人が、お金をかけずに、苦労せずにできる取組みがある。ポスター1枚でできる事業で、みんなが楽しめ、後始末に人がきて、新たなつながりへと発展していく。

【東京都 堀越さん】

- * 「開かれた学校づくり」のなかで行政としてネットワークづくりの支援をおこなっている。
- * うまくいっている例として「図書館ボランティア」があり、ボランティアの人たちにより図書館が綺麗になっていくと教師の対応が変わってきた。
- * 学校に外部の人たちが入ることによって教師も含めて変わっていく。

【神奈川県 中川さん】

- * P T A主体で、親として子どもたちに何ができるかを考えて、地域の行事にP T Aが出向き、子どもたちの体験活動の場として一緒にできないかを訴えていった。
- * いろいろな所で協力してくれ、中学生が地域活動に参加することが多くなった。
- * そのなかで、教師が一番変わった。理解を示すようになった。
- * 失敗としては、中学生の「ソーラン隊」のために親と教師がハッピーを揃えようとしたが、子どもたちの反対でやめたこと。子どもたちの気持ちを聴きながら活動していくことが大切だと改めてわかった。

【静岡県 渡邊さん】

- * 「青少年が参加するまちづくり」として、中学生が講師になっている。そこで「教える」という体験を通して自分自身に自信ができてプラスになっている。
- * とくに新しい事業をするときに「拡大・参画・交流・活用」の4つの視点から考えている。
- * 子どもたちの参画は大人の意識で変わる。学社融合に関わる時は、子どもが主役である。

【教育新聞 高橋さん】

- * 「学校新聞」を作ろうと校長に持ちかけ、生徒に取材方法等を教える。作った新聞は地域の全戸に配布する。その過程で教師も子どももイキイキと授業ができた。

公文教育研究所 竹田さん】

- * 町おこしについて、地域以外の人たちの参加はどうするのか。

【静岡県 渡邊さん】

- * 講座は市民に開放するので地域以外の人参加はOKです。

最後にパネリストより一言

【静岡県 城さん】

- * 「生涯学習」という言葉から活動に入っていた。地域の人に呼びかけ、盛り上げ、学校に提言するようにしている。

【東京都 堀越さん】

- * サポートネットと座談会を開き、良い事例を拾い集めて、横のつながりを広げていきたい。

【東京都 梶野さん】

- * 学校と地域をつなぐコーディネーター役となる、新しい力を持っている人々を発掘していきたい。

【新潟県 和泉さん】

- * P (ぱっと) T (楽しく) A (遊びましょう) という具合に、親どうしの横のつながりを深めていきたい。

【コーディネーター 宮崎さん】

- * ここでは、結論やまとめのようなものはない。参加者それぞれが今後の活動のヒントとなるようなものを持って帰ってもらえばありがたい。

(文責 三上)

「融合フォーラム2003 in 大阪」の感想から

アンケート提出 24名、複数回答あり

1 あなたは、このフォーラムについて何で知りましたか。

(8) 会報

- (2) 新聞や雑誌の案内 (それは、)
(15) その他 ()

2 このフォーラムは、何がよかったですか。(いくつでも)

- (18) 提言
(15) 分科会
(9) 屋台発表
(7) 夜の懇親会
(4) 分科会の概要発表
(12) ダイアローグ
(2) ふれあいタイム

3 このフォーラムに対するご意見・ご希望

- ・ ダイアローグの出演者に大変興味がありました。1日目の分科会もすばらしかったです。
- ・ 初参加。楽しかったです。参加者みんなが元気なので、うらやましかったです。
- ・ 予算面もあると思いますが、宿泊施設はもう少し充実したところをお願いしたい。毎年、どんどん人が増えるのを楽しみにしています。
- ・ それぞれの立場で、あるときは立場を越えていかに学校と地域が融合していくか、この輪が確実に広がっていることを実感しました。今回は、地域の方々、特に保護者・公民館・大先輩の生き生きとした実践報告に心が動かされました。
- ・ 事務局そして全国の数多くの元気をいただき、これからの自分の公私にわたる活動のエネルギーになるような気がしています。
- ・ 毎回、熱気のある方々との出会いがあり、とても刺激になります。都道府県行政にいる立場として何ができるか改めて考えていきたいと思っています。
- ・ この会場を選んだのは、作戦だったのでしょうか。できればもう少し交通の便がよいところがあるとよいです。
- ・ 毎回内容が充実していて、片道6時間を掛けて参加した甲斐がありました。
- ・ いろいろな実践にふれ、元気をもらえる。山本さんの話や第1分科会の話やぜひ聞きたかったです。レジュメを読んで、地元のグループや知人に伝えたいです。
- ・ 2回目の参加ですが、より身近に感じられ内容も充実してきたように思います。
- ・ 自分の地域を見つめ直す機会をもらった。よその地域を知ることで、自分の地域の良さや問題点を考えた。庄子さんの資料をコピーして地元の公民館長にあげるつもりです。
- ・ 非常に多くのパワーとヒントをいただきました。初めて参加しましたが、実に多くの身のある話が聞けました。
- ・ 多くの人たちが学社融合について真剣に考え、熱くなっている場面が数多く見られてパワーをもらった。みんなキャラが強いと思った。
- ・ 素晴らしい企画でした。全部を聞けなかったのが残念です。庄子さんの提言、融合の最後目標について気づけなかった視点を教えられました。ダイアローグは素晴らしいお二人の話と油谷さんの見事な仕切、ありがとうございました。
- ・ 自分の意識が変わって、機会があれば今後も参加したい。
- ・ 有意義なフォーラムでした。
- ・ 初参加でしたが、すべてにおいて感激しました。また参加したいと思いました。元気・情熱をたくさんたくさんいただきました。
- ・ よかったよかった、ちょっと遠いだけ！ もっと参加する人がいっぱいであつたら……。もったいないですね、素晴らしい会なのに。
- ・ 私は大学生で、何の地域実践も行っていないが、各地のいろいろな実践例を聞いて、いろいろ考えさせられました。庄子さん、大平さん、田上さんの話が聞け、自分の視野が広がった気がして、進路をどうしようかなあと真剣に考えたいなあとと思った。自分の夢に負けたらアカンよと思った。この機会が与えられたことを感謝します。
- ・ また明日からがんばろうと思った。
- ・ 全国的な事例が聞けて有意義でした。融合は目的ではなくて手段だと言われたとき、目的は何なのか考えます。学校はまだまだ自己完結的にとらえている教員(校長も含んで)が圧倒的です。自分の中でとりまとめが必要です。
- ・ 今回はじめて存在を知りました。ありがとうございました。
- ・ 庄子さんの提言の中で学社融合に向けての歩みに感動しました。私も自分の役職の中でできる実証実験を進めていくことを決意しました。

4 学校と地域の融合教育研究会に対して

関心が（ あり； 23名 ない； 1名 ）

「ある」と答えた方に、それは、どんなことについてですか。

- ・ 全国の情報が多く有す 理念がしっかりしている 前進するエネルギーを感じる
- ・ 全国各地の情報が得られる
- ・ まちづくりの一環としての運動、生涯教育を目指す融合教育に興味あり。
- ・ 地域の中に、世代を越えたコミュニケーションを取り戻すキッカケになると思う。また学校を中核とすることで、子どもに関わる大人がつながり合い、見守る形ができると思う。
- ・ この大会を参考にして、自分たちの地域の「教育学習会」を開きたい。
- ・ まちづくり・ひとづくり
- ・ いかに学校を開いた学校にするか。また地域コーディネータの育成をどうするか。
- ・ 各地の情報をいただき、元気をいただけます。
- ・ 地域コミュニティの役員をやっていて情報を収集したい。
- ・ 学校教育の改革、社会教育の必要性（公民館のこれからのあり方）、子供たちのボランティア参加。
- ・ 現在、小学校4年の男児を子育て中です。保護者からみると学校の先生たちには不満がいっぱいです。
私は、自分の子どもの通う学校にある学童保育の指導員をしています。自分の子どもも保育する子ども地域に守られながら、共にすくすく育てたいです。
- ・ 学校に還元することができ、その還元したことをまた地域に戻してやりたいと思っています。
- ・ 地域の中で子どもを育てて行きたいという持論から、いかに地域と学校が融合していけるのか、様々な事を実践し確立していきたくので。全国の実践報告からもかなりの影響を受け、元気パワーをいただいています。
- ・ 学校が開放され地域の人たちにとっても集まり、役に立てる場となることが望ましい。
- ・ まず最初の一步をどのように出すのかな？と思っています。
- ・ 融合がうまくいくと学校のスリム化が進む、と会長さんは第4分科会で言われましたが、そこに至るまでの筋道を指ししめせないから教職員は身を引くのではないかと思います。
- ・ 一般の地域の間人が学校とかかわることについて
- ・ 主体的に学ぶ人たちの集い、素晴らしい活気があり元気をいただいています。いろいろな立場で同じ目的のために汗をかいている人たちと出会い、よりすばらしい「人のすばらしさ」を感じました。
- ・ 初歩的なことかもしれませんが、学校開放です。
- ・ 融合研の組織等については、インターネットで検索してみます。

5 その他（どんなことでも）

- ・ ダイアローグがとても勉強になりました。
- ・ 有意義な大会であった。近くでこういう会があれば参加したいと思っています。
- ・ 「先生やなあ。」 滋賀でも大阪でも長野他、多々。一人一人が、そしてつながりながらがんばっている様子を、目で耳でハートで感じる事ができたフォーラム。「共に地域で生きていこう。」そう地元に戻って伝えたい。「完璧を求めるムード」コミュニティ作りも同じかなあ。あまり完璧を求めない方が・・・。
- ・ なにか自分に出きることを探してみます。
- ・ 大平光代氏の話は、何度聞いても感動する。
- ・ 来年の「岩手大会」に向けて積み立て預金をして参加したいと思っています。インタビューダイアローグは素晴らしい。一人一人の力を合わせる融合を広げていきたいと思いました。
- ・ 学校開放事業に関わって改めて地域を開くこと、学校を開くことの難しさを感じています。その点で、第三分科会の内容は自分たちの住む地域を作るという点に置いて、大いにヒントを得ることができました。自分たちが住む地域だから自分たちが住みやすくする、未来の子供たちのために住みやすくする。そのための行動が「まちづくり」なのではないかと感じました。私たちの町は、なぜか「自分たちのために」「周りの人たちのために」という視点が欠けているような気がします。帰ったら少しでも今日学んだことを生かせるように取り組んでいきたいと思っています。
- ・ 今、自分の勤務校の地域だけの融合だけなので、その活動をさらに近くの学校に広げられるようにしていきたいと考えています。情報を流して活用できるシステムを考えていきたいと考えています。
- ・ 私は今21歳ですが、うちの世代はとてもあきらめがよく、今の社会に期待していない感じを受ける。日本が落ち目になってきた時に中高時代を過ごした。日本の将来に期待感がないことを大人が言うのがテレビから流れ、自分たちの世代が少年犯罪を犯した。先が見えない不安感。私は日本社会全体を変えることはできないかもしれない。しかし自分に家族ができれば家族だけに

- は真剣に向き合いたいと思う。
- ・ 放送のアンプがいまいちで音響が悪く、分科会の概要発表が聞き難いところがあり残念。
 - ・ 今後のフォーラムは交通の便のよいところで開催してほしい。
 - ・ 新聞や雑誌の案内は目にしたことがなかった。もう少しいろいろな人に知らせることができたらよかったと思う。特に教育関係者に多く聞いて欲しいと思います。会場が響いて話が聞きづらく残念でした。
 - ・ 「せり」に時間がとられ、会員との交流が充分できませんでした。
 - ・ 全体的にマイクの調子が悪かったのか話がよく聞き取れなくて残念でした。
 - ・ 体育館のマイクの調子が悪く、山本健慈さんと大平光代さんの声がよく聞き取れませんでした。
 - ・ 音響が不備でとてもはあって聞きづらかった。

ありがとうございました。

2 総会の結果より

これまで、規約に基づく年1回の融合研の総会は、フォーラムの時に行ってきました。しかし、フォーラムに参加できない人にも総会で意思表示をしていただけるようにということで、通信による返信をプラスして総会が行われました。

(総会議事)

- 平成14年度事業報告
- 平成14年度会計報告
- 平成15年度事業計画
- 平成15年度役員
- その他、事務局会議での決定事項からの提案

「平成14年度事業報告」について

- 平成14年4月27日 北九州市教育委員会と福岡フォーラムの協力検討(於、秋津コミュニティ)
- 5月11日 福岡フォーラム現地実行委員長と詳細検討(於、福岡市)
- 16日 事務局会議(於、東京「パンゲア」)
- 6月1日 東北支部設立研修会(於、岩手県紫波町)
- 7月4日 事務局会議(於、東京「パンゲア」)
- 8月10日~11日 融合フォーラムin福岡

「平成14年度会計報告」について

平成14年度会計報告

収入の部		908.387円
(内訳)		
繰越金		310.366円
会費(3000円×190)		570.000円
(2000円×12)		24.000円
資料代		4.000円
利息		21円
支出の部		442.222円
(内訳)		
通信費		289.476円
会議費		17.703円
事務用品		70.052円
テープ・フィルム		20.476円

ドメイン料 44,415円
通帳開設 100円

残高・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 466,165円

監査の結果、適正に処理されていることを認めます。

監査 野澤令照
小山みさ

「平成15年度事業計画」について

平成15年4月 6日 事務局会議（於、秋津コミュニティ）
27日 事務局編集会議（於、宮崎雅子事務局長宅）
5月10日～11日 千葉支部設立研修会（於、柏市「県民プラザ」）
6月20日 事務局会議（於、東京「パンゲア」）
9月27日～28日 融合フォーラムin大阪

「平成15年度役員」

<役員>

会長	宮崎 稔	（習志野市立大久保東小学校）
副会長	岸 裕司	（習志野市秋津コミュニティ）
同	油谷雅次	（大阪府北貝塚小学校コミュニティルーム運営委員長）
監事	野澤令照	（仙台市教育委員会）
同	小山みさ	（市川市ナーチャリングコミュニティ）
プログラム開発委員長	越田幸洋	（鹿沼市立石川小学校）

<事務局>

事務局長	宮崎雅子	（習志野市秋津コミュニティ）
同次長	齊藤正一	（NPO法人LIT）
事務局員	矢吹正徳	（日本教育新聞）
同	種田祝次	（習志野市秋津コミュニティ）
同	稲垣陽一郎	（市川市ナーチャリングコミュニティ）
同	車 育子	（習志野市秋津コミュニティ）
同	城 佐知子	（富士宮市立大富士中学校PTA）
広報担当	原 省司	（上越市立大手町小学校PTA）
事務局員	中村智成	（NPO法人LIT広島）
	佐竹正実	（習志野市秋津コミュニティ）
	一色真司	（代々木学院）

融合研の設立のときからの会員であり副会長であった「庄子平弥さん」が、一身上の都合で副会長を辞任されました。これまでの活動推進に対するご労苦にたいして感謝申し上げます。なお、これからも、会員としての活動は継続し、様々な形でサポートしていただけます。

6 その他

2004年度のフォーラム開催地は、東北支部の岩手県に決定しました。

2005年度の立候補を受け付けます。また、「2006年度以降なら」という地域でも構いません。「今は、まだあまり推進されていないが・・・」という地域でも結構です。フォーラムを機会に、融合の推進が図られたという地域もごさいますので、ので、どうぞ、奮ってご応募ください。「フォーラムは開催できないが、勉強会やミニフォーラムならやってみたい。」という地域は、ご連絡下さい。事務局会議で異論がなければ、活動経費として「5万円」を補助します。